

たりのものであつたのを、後に柱が圓いからこれも亦圓い方が似合ふだらう、といふ位な石工の淺薄な考へでかうして了つたのかも知れぬ。併しながら鎌倉時代と思はるゝ門についてゐるのであるから、あとのものかも知れぬが當分異例としてこゝへ掲げておくのである(第二百十八・第  
二百十九圖)

(昭和三年五月二十九日稿了)

## 紹介

### ● 上代驛制の研究

坂本 太郎著

交通は社會構成の基礎的契機であり、その進歩はまた歴史發展の有力なる動因をなすのであるが、國史の研

究に於ては此の分野は今なほ未墾の荒野として取殘されたる觀なしとしない。著者はここに慨する所あつてその開拓を圖らんじしたものであるが、本書は正に其第一收穫である。著者の見解に従へば交通の發達には、地方交通國內交通世界交通の三時代を劃すべく、驛遞制度は國內交通時代の著しき特徴をなすといふ、此の見地よりして驛の草創盛運衰微を精密に説いてゐる。其態度に聊か靜的に過ぐるの憾がある。尙ほ一般交通發達史に於ける驛遞制の位置乃至意義の如きも評論せられ、これによつて社會發達の過程に、驛制を出現せしむる理由、またその衰滅を來たす所以に特殊なるものがあることを著者によつて聞くを得るならば、學界の幸とするところである。(菊版二七一頁、東京國文堂發行、價二、五〇)(肥後)

### ● 封建社會の統制と鬭爭

黑正 巖著

本書に收録された十八編の論文は、各々研究對象、記述の上に個々異なるものなれど其間、封建社會自らの自己否定、即ちその必然的崩壞の過程にありとする思想に